

世界文化遺産五箇山のデジタルアーカイブ化

岐阜女子大学 文化情報研究センター

越中五箇山とは、江戸時代の加賀藩領の地域名称で、赤尾谷、上梨谷、下梨谷、小谷、利賀谷の5つの地域からなり、平村、上平村、利賀村の三村を合わせた地域の総称である。(上平村は平成16年11月1日、近隣7町村と市町村合併し、「南砺市」となった。)

相倉合掌造り集落と菅沼合掌造り集落を中心とし、合掌造りの家が建っている。

五箇山には、確実な文献・資料・民間伝承等がなく、断定はできないが、平家落人伝説など、現在でも多くの説が残る地域である。

五箇山では、古くから塩硝作りが行われていて、保存されている古文書の中にも、塩硝に関する記述が多くある。

1. 相倉合掌造り集落

庄川沿いの山稜の中腹傾斜地に、天然のブナ林に囲まれて23棟の合掌造り家屋がある。

村は単なる家の集合体ではなく、桑畑、繭を干すムロ、楮蒸し窯などの作業場、また寺や神社、雪崩の被害を防ぐ雪持林(オーバエ)など村人共有の施設や場所からなる。



2. 菅沼合掌造り集落

五箇山地方の山あい、国道156号と庄川に囲まれた河岸段丘に集落を形成。合掌造り家屋は9棟あり、その他に、神社、土蔵、板倉などが残されている。

<塩硝の館>

江戸時代、五箇山の一大産業だった塩硝づくり。製造の道具を展示し、その過程を材料採取から出荷まで、人形や影絵などを取り入れて分かりやすく再現している。



3. こきりこ

こきりこは、越中五箇山・上梨の山里を中心に伝承された全国的に有名な古代民謡。



『越の下草』や二十四輩順図絵、『奇談北国巡杖記』などの古文獻に記載され、来歴が明確で、大化の改新（約1400年前）の頃から田楽として歌いつがれてきたという伝承も信憑性があるとされている。

「こきりこ」は、越中五箇山の古社、上梨白山宮の祭礼において歌い踊られていた。

楽器は、鍬金、筑子竹、ささら、鼓、横笛、太鼓など往時のままのものを使い、五穀豊穰を祈り祝う純朴な踊りである。

こきりこは、「筑子」、「小切子」とも書き、日本の竹で作った簡素な楽器に由来しているといわれている。これを手首を回転させながら打ち鳴らすと、軽やかな音を出す。また、竹の板を束ねて半円に構えて波打たせて鳴らす「ささら」は特徴的な音である。鍬金や太鼓も田楽のころから変わらずこきりこ節の伴奏を奏でている。

<参考>『五箇山の民俗史』小坂谷福治、上平村教育委員会（2002.3.20）



撮影位置の再現

雪の中で舞われる“こきりこ”を撮影している当時は、GPSを用いた位置情報の収集を行っていなかった、そのため、当時の撮影者や画像を確認しながら撮影位置の再現・位置情報の取得を行った。



緯度:
N 36° 24' 13.74"
経度:
E 136° 53' 13.61"
高度: 海拔 338m
撮影日時:
2008-06-03
10:31:52
カメラの方向: 北

デジタルアーカイブの資料収集で、古い写真などでこの位置から撮影されたか特定が困難なことも多い。

歴史的な資料として、メタデータの構成で場所が不明では困る。このため、過去に撮影された現地でデジタルカメラを用いて写真と同じ撮影場所と思われる位置から撮影し、ほぼ一致した地点を見出す。

この撮影場所を見出せたならば、その位置のGPSとカメラの方向を記録し、デジタルアーカイブのメタデータに記録する。このような方法を用いて、古い写真の位置関係を調べる事もデジタルアーカイブの構成では重要になる。(なお、五箇山の撮影は、五箇山観光協会の支援で故後藤カメラマン、後藤忠彦、大木、久田等による。)